令和５年度第１回　市民活動・ボランティアサポートセンター運営会議　会議録

日　時　　令和５年５月２３日（火）　14：00～15：45

場　所　　姫路市市民会館　５階　第11会議室

出席者　　構成員７名　　事務局５名

（構成員）　藤本 真里　座長　　米谷 啓和　氏　　三宅　靖子　氏
大西　麻衣子　氏　　中安　学　氏　　八田　友和　氏
本上　聖子　氏

（事務局）　市民参画部　平石部長、市民活動推進課　門口 課長
市民活動・ボランティアサポートセンター　岸本 所長　吉田 係長　得平 主任

次　第

１　開　会

２　報　告

（１）　令和４年度　事業報告について

（２）　令和５年度　事業計画について

３　議　事

令和４年度ひめじおん講座の開催実績及び令和５年度の講座の内容について

４　閉　会

会議の進行記録（要点筆記）

事務局： 報告事項１「令和４年度事業報告について」を資料１に従って説明

構成員： 事業費について決算残額が多い印象だが、その理由は何か。

事務局： 特段、この事業ができなかったというわけではないが、各費目全体的に少しずつ余剰が出た。

構成員： 効率的に予算執行していると推察するが、民間企業のように年度途中で余剰額を臨機応変に執行する仕組みはないのか。

事務局： 各事業に対しての財布がしっかり分かれており、別の事業に予算を充てるのは難しい。年度末に向けて費用がかさむ「ひめじおんまつり」があったので、ある程度余力を残しつつ執行していたというのが実情だ。

座　長： 普段購入できないものや、修繕などのために執行するのは難しいのか。

事務局： 消耗品のような予算にはある程度自由度があるが、予算執行上高額な物品を購入するのは難しい仕組みがある。

座　長： 「はりまホッププロジェクト」は、さまざまな人が参加し繋がっていく素晴らしいプロジェクトだと思うが、講座の参加者が少ない印象だ。

事務局： 申し込みはあったが、直前に第何波かのコロナの流行があり、それが原因で欠席する方が多数あった。しかし、内容は非常に良かったので、アンケート結果を見ても満足度が高かったように思う。

構成員： LINE など SNS の発信は良いと思うが、LINE をしていない方へのアプローチをどのようにしているのか。また、Instagram 開始の広報はどのように行っているのか。

事務局: 毎月発行のボランティア通信にLINEやInstagramをQRコードで掲載している。LINE については、公式 HP で PR したり、市の職員に向けても新人研修や職員向けの掲示板に掲載している。ほかにもボランティアメールの終了に伴い LINE に移行する旨を何度かメールで案内したが、登録者数を見るとあまり LINE に移行され

ていないというのが実情で、今後どのように移行していただくかが課題だ。

構成員： LINE は、名刺を活用して交換するときに積極的に登録を促すなど個別に PR しないと、なかなか増えない。

構成員： 私はその分野が本業だが、非営利の団体が LINE の登録者を増やすのは難しいと感じている。LINE 自体が営利目的の利用が中心で、クーポンなどの特典を付けられるが、非営利団体はそれができない。今後、相談してもらえたら協力する。

構成員： 若い世代の人からは LINE はもう古いと聞く。大学生くらいだと Instagram でメッセージのやりとりをしているので、世代によって使うツールが違うという印象だ。あと質問になるが、「市民活動ネットひめじ」について、登録団体数とアクセス数の推移がほぼ同じなのに、ページビュー数が非常に増えているのはどういう理由か。

事務局： アクセス数が実際見ていただいた数だと私たちは判断している。というのも、ページビュー数はいろいろなページを見ることでカウントが増えることになるのだが、よく言えば多くのページにアクセスされている、しかし一方で見たいページにたどりついていないのではという思いもある。より使いやすくなるよう、業者の方と相談して随時修正しているところだ。

構成員： 市民活動ネットひめじは令和２年の４月にリニューアルしているが、そのリニューアルで団体発信の部分も強化されたのではないか。それによって団体が HP を活用し、掲載した記事を積極的に見ているという要因もあると思う。

座　長： 発信するツールの中で一番効果的なのは何か。

構成員： やはり、ホームページが一番基礎になるが、SNS の中で効果的なものというは、その時々のトレンドかと思う。LINE、Instagram などそれぞれを入り口として、より詳しく見るのにホームページに誘導していくのが正当なやり方ではないか。

構成員： センターも FM ゲンキの出演枠を持っているのか。また、どのように出演者を決めているのか。

事務局： 「飛び出せ！まちの元気人」という姫路市提供の番組で、毎月１回第３火曜日にボラサポの枠があり、希望する団体に出演いただいている。空いている月は、イベントを企画されている団体を中心に声かけをしている。

構成員： コミュニティ食堂ネットワーク会議にセンターは参加しているが、どのような会議なのか。

事務局： 姫路市社協さんとコープこうべさんの共催の会議で、姫路市からはこども支援課やセンターが参加している。こども食堂をされている団体だけでなく、これから立ち上げたいというグループや、姫路市内に限らず近隣の播磨圏域のグループの方もいらっしゃる。また、そういう団体を支援したいという企業も来られて、様々な情報を交換している会議だ。

座　長： 「はじめのイッポ」は良い取り組みだと思うが、実際どれくらいの人がやりたいと申し出て、どれくらいマッチングしているのか。

事務局： センターに初めて相談に来られる方が、まず「はじめのイッポ」の掲示に目を向けられている。それを見て、こちらが案内するようなケースが多いが、このメニューは常時ボラサポでご案内しているボランティアメニューと重なるものも多いので、はじめのイッポとしてのカウントはしてはいない。

座　長： では、報告事項２「令和５年度事業計画について」を事務局より説明していただきたい。

事務局： 報告事項２「令和５年度事業計画について」を資料２に従って説明

構成員： 全体的な漠然とした意見になるが、センターの役割と地縁組織を中心とした自治会活動との連携が、今後ますます大事だと感じている。というのも、若い人達は自発性に基づいた活動には積極的だが、地域を支える一員という自覚を持ってもらうのは難しく、自治会活動では慢性的に担い手が不足している。これからは、自発性に基づくようなプログラムや考え方が地縁組織に浸透することでその問題が解消されるのではと考えている。例えば城の西地域、城西・城乾地域では「みどりを楽しむウォーキング」や「公園の剪定講座」などの企画に人が集まる。住んでいる場所でも活かせるとか、知っている人を助けるのに自身のスキルが役立つとか、相互浸透があればより良いまちになると思うので、センターとしても何か工夫ができれば良いのでは。それは情報発信の在り方かもしれないし、プログラムの在り方なのかもしれないが、そこを意識した新しい枠組みがあると良いのではと感じた。市民活動推進課が所轄なので、そういう意味でも連携していけるのではないか。

事務局： 実際、自治会の中でNPOを立ち上げられた地区もいくつかあり、重要なことだと認識している。ただ、地区によっては外部からの助けが必要なこともあり、重要なことではあると同時に大変難しい課題だと感じている。

構成員： 非常に難しいと思うが、だからこそセンターの役割がそこにあるのではとも思うので、是非そういった視点で検討していただきたい。
最近、神社でイベントをしたが、開催に至るまでの調整が非常にスムーズだった。その要因を考えたとき、神社という場所が何百年と続いている地域の集いの場であり、地域や自治会やボランティアが融合しうる場だということに気づいた。宗教と行政というのは切り離すべき部分もあるが、姫路のまつり文化の浸透を考えても、一つの場として良いのではと思う。

座　長： どの地域も担い手不足という課題を抱えているが、川西市ではSNSを利用した市長からの発信で、その課題を解決すべく若い方を中心とした会議を開催している。そこで話を聞くと、若い方から「地域活動があるということを知らなかっただけで、実際に参加すると、楽しい上に人の役に立つことが嬉しい」という意見があった。また、地域活動に参加していない方からの疑問や質問に自治会が答えるという取り組みもしており、「一度加入すると辞められないのでは」とか、「お金がかかるのではないか」といった質問に答えて、その不安を取り除いている。こういったプロセスを踏むことで、地域活動に参加するハードルが低くなり、自治会側も担い手不足になる原因に気づく。また、これからは受け入れる側も、好きな時間に参加できるとか特技を活かした活動だけ手伝うといった柔軟な考え方を取り入れることも必要ではないかと思う。

座　長： センターが力を入れている新規事業、ひめボラについてはどうか。

構成員： 企画にも多少関わったが、この事業は、夏ボラからヒントを得たもので、親子で相談に来られた方が大人の夏ボラはないのかと問われたことがきっかけだった。夏ボラは学生が対象だが、こどもからシニアまで幅広い層が参加できるものにした。また、普段から、相談に来られた時にいつもタイミングよく紹介できるとは限らないし、コロナの影響で特にここ数年は案内することが難しかった。こういった企画で、固定的にボランティアを受け入れてくれる団体が増えることも期待でき、毎年１１月はひめボラがあるという認識が浸透していけばという思いもある。また、個人ボランティアに対するサポートも少し弱く感じていたので、そういった面でも機能していくと良いと思う。さらにひめボラ市を組み合わせることで「ひめじおんまつり」でステージ参加されていた団体やブース出展されていた団体の活動発表の場も引き

継がれるので、非常に楽しみにしている。

座　長：「ひめボラ」のロゴを自由に使えることにして名刺やステッカーに入れていいただくことで、周知されこの取り組みが広がっていくのではないか。以前、小さな事業所が多数ある墨田区の「まちかど博物館」という取り組みを見学した。これは事業所情報をマップにして、その事業所の職人の方から直接説明が聞けるといった取り組みで、大変楽しくまちも賑わっていた。ひめボラもそれに似た地域と参加者との盛り上がりを期待する。

構成員：ひめボラの受け入れ団体の対象として、例えば社協で協力いただいている自治会や民生委員などを中心とする社協支部活動が希望した場合に加えることは可能か。

事務局：それはふれあいサロンや、ふれあい食事などか。

構成員：ふれあい食事は検便などもあり衛生面で難しいので、子育て支援事業やふれあいサロンなどの事業を想定している。社会福祉協議会において、今年度から担い手不足という課題を解消するために新しい事業をスタートさせた。受け入れる側の課題も見えてきており、実際このひめボラへの参加希望を聞いても手を挙げる団体がないもしれないが、今まで地域だけで行ってきたことが広がって連携することができれば、面白いことになるのではと考えている。

事務局：社会福祉施設などを対象としているが、施設が大変多いのでどの分野に案内するかを検討しているところであった。もし、そういう分野で希望される地域があれば参加いただきたい。

座　長：自治会の中にも、例えば子育て支援やこども食堂のように自発的なボランティア団体と同じ活動もある。その対象は地元中心かもしれないが、担い手として誰が参加しても良いという内容であれば、そういう交流があっても良いのではないか。

構成員：受け入れる側にも課題があり、地元の方に参加してほしいという地域も多い。しかし今後の担い手不足を考えると、これからは受け入れ体制の部分も話し合っていく必要があると考えている。校区外の方も手を挙げる地域もあるかもしれないので、メニューの一つとして参加できるとありがたい。

座　長：最初から参加団体が多すぎて困るということはないと思うので、広く声掛けをして受け入れていくべき。ただ、市や社協から参加を強制するのではなく、施設や団体

の自主性を大事にしてほしい。自ら手を挙げて参加するというプロセスに意味がある。

構成員： ひめボラとひめボラ市は時期的には重なっているが、この２つのイベントの連携が少し弱いと感じる。相乗効果を生むためにも、この２つをもう少し関連性を強調してはどうか。

事務局： 現在、ひめボラ参加団体の案内チラシなどにもひめボラ市の告知をしており、連携するイベントだということを今後も広報していく。

座　長： ひめじおんまつりを休止してひめボラを始めるにあたり、まつりでしていたステージと展示をしなければということでひめボラ市を始めたのではないかと私は思っている。そもそもひめじおんまつりは、活動団体の相互の交流、市民への PR という目的から自発的に始まったものだ。その趣旨からいうと、この事業はまつりを引きずらずに切り離して進めた方が良いのではないか。

構成員： ひめボラ市は今までと場所を変えて露出度を高めようとしているのは理解できるが、ひめボラとどう絡ませて連携させるのかがポイントになってくるのではないかと思う。

構成員： 私はひめボラ市は非常に良い取り組みだと感じている。ひめボラは１ヶ月間あるので、その中で１つのピークをつくる方が分かりやすいし、ひめボラ市をきっかけにボランティアをしてみたい人が出ることも予想される。WEB やチラシを見ただけでは尻込みする方も、実際に活動している人に触れることで敷居が低くなると思うので、ひめボラ市は開催すべきだと思う。ひめボラも良い企画だと思うが、先ほども意見が出ていたように、受け入れる側の心構えが重要だと思う。研修や受け入れ側の心得などの配布も検討してはどうか。受け入れ方によって今後参加者がその団体に加わったり、新しくボランティア団体を始めるということも十分ありうる。また、ひめボラだけでは伝わりにくいので、心に響くサブタイトルが決め手になる。若い人だけでなく、子育てがひと段落した人や、親の介護が終わってこれから何始めたいという方の立場に立って、自分でも役に立つことがあるかもしれない、やってみようと思えるようなサブタイトルをつけてほしい。

構成員： 駅前を管理する団体に関わっているが、傾向を見ると音と視覚的な効果があれば人は集まるが、こちらがターゲットとする層に寄ってもらうのがなかなか難しい。ひめボラ市は、その辺りの工夫が必要かと思う。それから、その日は所属する団体で

ウォーキングイベントをするので、ひめボラと関連イベントの情報発信が相互にできれば厚みが増してよいと思う。

座　長：事業終了後に、総括することも大事だ。この事業を継続してやっていくのか、発展せていくのか、主催はセンターが良いのか、市民の方々に自由な発想でやっていただくのが良いのか、今後の形を意識して総括する必要がある。センターが掲げる目的を達成するためには、ベストな運営体制はどれなのか。もしかするとそれは、中間支援組織に託すことかもしれないし、有志の手によるものかもしれない、そのあたりは検討課題にして意識してほしい。

事務局：議事「令和５年度ひめじおん講座の内容について」を資料３に従って説明

座　長：皆さん、いろいろな経験をお持ちだと思うので、こういう講座が良いのではとか、この講師はどうかというようなアドバイスをいただきたい。
傾聴が人気なので、傾聴をしているグループに講師をお任せすれば今後の活動につながるのではないか。

事務局：センターとしても、傾聴の団体を増やしたい、登録していただきたいという思いがあり、過去何回か傾聴講座を開催したが、実際に１回２回の講座ではボランティアを始めようという人はなかなか育たない。今回は、傾聴のプロを講師として招いたので、登録団体で唯一傾聴をされている団体に生徒としても参加していただいた。

座　長：講座の回数を増やしても良いのではないか。

構成員：このグラレコ講座は資料の中の分野分けで言うと、どれに当てはまるのか。

事務局：活動中の方向けになる。

構成員：ほかの分野も実施するということか。

事務局：この３分野、バランスよく開催できるよう組み立てていきたい。

座　長：実績を見ると、初心者向けの講座が多い傾向があるが、それはボランティアをしていない人に興味を持ってもらいたいというセンターの意図だと思う。

構成員：過去の実績を振り返ると、交流を打ち出すと参加者が集まりにくい傾向がある。傾

聴のノウハウを得られるとか、スマホで撮影技術を学べるとか確実に何か習得できる講座ほど参加者が多い。また、ボランティアを目的に参加していない人も非常に多く、テーマの立て方は難しいと感じていた。交流をテーマにするならば工夫が必要だと思う。

構成員： 傾聴ボランティアが好評なら、シリーズ化するのも良いのではないか。また、ボランティアによって、地域でこどもを受け入れるといったコミュニティが育つような展開があればよいと思う。例えば地域のシニアの方がこどもを預かるとか、地域とこどもを巻き込んだボランティア活動が拡がることで、こどもや親御さんにはもちろん、日頃こどもに関わることがない世代にも良い影響があるのではないかと思う。

構成員： ひめボラに参加すると活動証明書を発行してもらえるのか。

事務局： 基本的に団体から証明発行していただく。学校指定の書式があれば持参してもらえば良いし、独自の書式を準備してくださっている団体もある。事前に連絡をいただければ、こちらから団体につなぐ。

事務局： そういった要望をよく聞くが、証明書は効果があるのか。

構成員： 入試制度の変化で、いわゆる筆記試験ではなく推薦入試で大学に進学する子が増えている。推薦入試の際にボランティア活動をしたと PR しても、それが本当か分からないというケースがあり、証明の提出を求める大学が多くなってきた。私の学校では推薦の学内選考のときですら、それを必要としている。証明によって、生徒はボランティアをしたという達成感が生まれるという効果もあるので、大切だと思う。また、私の学校からは姫路城マラソンに 100 人くらいの生徒がボランティアとして参加したが、そのうち 80 人くらいの参加の理由は証明書だった。それが良いか悪いかわからないが、中にはボランティアは無理と食わず嫌いな生徒もいるので、始めるきっかけとしては大切なことではないかと感じている。実際、ボランティアに参加して証明をもらったことが嬉しかったのか、そのあと違うボランティアに参加したという生徒が 1 割～2 割ほどいた。

構成員: AO 入試の際、高校時代にボランティア活動をしていたと自己 PR する生徒も多い。活動をして証明をもらうことで、それが自信になり社会とつながるきっかけになっていると思う。

座　長： 参加者に向けて活動証明を出すことを PR してはどうか。

構成員： 団体に向けて、証明を出してほしいとセンターから案内すると良いのでは。

座　長： 今、私の職場ではダイバーシティとインクルージョンに力を入れている。今までも取り組んできたことではあるが、そういった新しいコンセプトを打ち出すと、今までと違った人や団体ともつながれることもある。